

昭和40年6月14日

会 員 各 位 殿
剣 道 部 長 殿

全日本実業団剣道連盟
会長 矢野 一郎

拝啓 新緑の候ますますご清栄の段お喜び申し上げます。

当連盟の発展のためには平素から、一方ならぬご高配をたまわって居りますことを、厚くお礼申し上げます。

さて、実業人剣道の正しい発達のためには何が必要であるかということについて、日頃私が考えておりますことを、去る5月13日に開催いたしました在京役員会でご披露申し上げ、その趣旨に基づいて今後の大会運営方法を別記のとおり変更することにご出席の役員各位のご賛同を得ましたので、更にこの趣旨を全国の役員各位にご報告申し上げ、ご意見を伺いましたところ、各位からも非常なご賛同をたまわった次第であります。

こゝにおきまして、会員の皆様にもこれをご報告申し上げますので、是れに基づき今後の大会運営に一段のご協力をたまわりますようお願い申し上げます。

記

実業人剣道の普及発達のために当連盟の為すべき仕事は大体次の三点にある。

- (1) 年々社会に加わる若い世代の人を対象とする剣道の奨励
- (2) 中年以後の社会人が心の支えと人間完成への道とすべき剣道修業のあり方の奨励
- (3) 相互の親睦と社会人剣道発展のためへの協力

この三つの目的を生かすために大会運営方法を下記のとおり改める。

第一部

技を中心として優勝を争う試合

之は若い人達の剣道奨励をねらうものである。

事前に地方予選を行ないその三回戦勝者が全国大会の出場資格を得る。

参加選手は五段までのものとする。

本年度の全国大会は11月中旬頃東京日本武道館にて開催の予定であるが、その前に行なう地方予選は東京・大阪・名古屋・福岡を開催地とする予定である。地方予選の経費は一部を本部で補助する用意がある。

以上の外全国大会の運営は従来どおりとする。

第二部

技の稽古時代を過ぎ社会人としての心の剣道を修練している人々の演武。勝敗にこだわらぬため無審判とする。

なお、全演武終了後審判団と役員協議のうえ最優秀選手一名を選び顕彰する。

第三部

よそでは観られぬような有志または特志の方々の模範演武。

第四部

交歓親睦のための稽古。

これらのものを一日に行なうことによって、この大会を実業人剣道の祭典たらしめることが有意義であると思われる。

以上のとおり協議決定されましたがご不審の点につきましては、私の平素の考え方を記しました趣意書をご高覧くださいますようお願い申し上げます。

敬 具

これからの実業団剣道

全日本実業団
剣道連盟会長

矢野 一郎

剣道が漸く世人の関心をひくようになって来たことは御同慶に堪えない。然しこれからの剣道を、ひろく青少年の育成と社会人の人づくりの為に役立たせるように活用してゆく為には、必ずしも現在の剣道のあり方だけでは充分ではない。

国が将来中学高校の正科として剣道を採用するという方針も、之等の青少年が後日社会人としてあらゆる分野に別れて活動する際に人間としての修練を積んでゆく為の基礎として役立たせる為に、剣道の基本的な技術と作法を一通り教えるという考えである。勿論体育としての意味もあるが、体育だけならば他のスポーツでも充分である。

従つて学校時代に於ける剣道の基礎教育については、現在のように技術を中心とする教え方で結構と思われる。又段級を与えるという事も奨励の意味に於て弊害はないだろう。

由来何事に於ても段級を設けることは、本質的には刺戟奨励の方便として行いものである。剣道に於てもその意味に於て、現行段位制の五段位までは、青少年に対し奨励策として有効であると思う。そして五段位になれば先ず技術の面は一通り勉強したと考えてよろしかろう。

しかし剣道を社会が要求しているのは、技術ではない。一通り身につけた技術作法を土台として、これから愈々社会人としての人間を作つてゆくことに剣道を活用し、工夫をしてゆくことが本来の目的でなければならぬ。

この事は恰も学業の勉強に似て居る。中学校、高等学校、大学と段階を経て教育をうけることは、将来社会人として自己完成に努力する為の基礎となるものを得ることであつて、学校で得た知識技術がその人間の価値ではなく、あくまで社会に出てから之を活かして使つて、自分を作り上げてゆく為に与えられた道具で

あり材料であると考えなければならぬ。剣道教育についても同様な意味がある。

そこで、剣道を広く社会人の人間づくりに役立たせる為には、如何なる心掛け、如何なる稽古、如何なる勉強が必要かということこそ、今後の剣道のあり方について一番重要な問題である。言い換えれば、剣道のあり方には、二段階があるべきであつて、第一段階は技の教育、第二段階に於ては心の修練、つまり人づくりの道でなければならぬ。

今日の剣道というものは第一段階の技の教育については研究も積まれ教育技術も進んで居て、初心者を指導することは昔よりも遙かに上手になつて居るが、第二段階の剣道というものについては関心が甚だ薄い。

現在ではあらゆる試合もポイント稼ぎに傾き、一般世間もまた他のスポーツ同様に之を扱うようになって来よう。凡てが技本位、勝負本位となつて、高段者と雖も、気力や気品の剣を見せてくれる人はなくなつて了り。

技の研究、技の鍛練は勿論大切である。殊に専門家たる者は、その職責として技の研習には重きを置く可きである。然しその結果、日本の剣道が専門技術家だけの剣道になつて了うことは大きな誤りである。組織にしても、専門家だけでは、日本国民全体の剣道は発達しない。段位称号の問題にしても、専門家の世界には必要なものかも知れない。しかし我々素人から見れば、専門技術家としての経歴や序列を示すもののようにしか見えない場合が多い。だが専門家の世界に之を存続させることは我々一向に反対する者ではないし、又反対する理由もない。さり乍ら、剣道本来の目的であり従つて一般国民が必要とする剣道による人づくりの方は、段級をつけて判定することは至難のことである。どれだけ人間が出来て居るかということは技や勝負とちがつて判定出来るものでもないし、又それを判定出来る資格のある審査員などがありつこは無い。

これを判定できるものは神様だけかも知れないが、そのほかには全国民であるというの外はない。自ら与論というものが、尊敬すべき長老をきめてくれる。例えば、美術学校出身者は山の様にあつても、卒業してから先は自分の工夫で自分を作つてゆくだけで称号も段階もない。しかし、栖鳳、大観が長老として、自然に尊敬されてゆくものである。

剣道人も人間としての価値に従つて評価されるようになることが正しい。その見方、その考え方が現在の社会には欠けて居る。剣道によつて大人物が出来て、国の為に働らいてくれたのだという認識。又剣道とはそういう風に

役立つものだという常識。を作ることが、これからの「全國民の爲の剣道」を普及させる爲には特に重要な点であると思う。

右様の考えに基いて、及ばずながら今後は実業団剣道連盟のゆき方に多少の工夫を加えようかと思う。

即ち従来のような五人一組の試合は、若い人たちの奨励の意味に於て、五段以下の選士に限定し、大いに技を戦わせる。之を第一部とすれば、別に第二部を新らしく設けて、各事業所毎に一名宛、日頃実業人として立派に人間つくりの爲に稽古をして居る人を推せんして貰い、人間として完成してゆく剣を、大会に於て眼のあたり十分見せて貰うことにしたい。従つて資格としては既に技は卒業して専ら心の稽古に入つて居る人であることとする。この第二部出場者については、持つてゐる段位称号などは一切現わさず平等に取扱ひ、凡て道を同じうする友という意味に於て一率に「道友」と呼ぶことにしたらどうだろうかと思う。

組み合わせは抽せんを原則とし、試合は無審判とし立会者一名を置き、時間を四分とか五分とかに限つて、その間十分に品格の高い剣を戦はせる。

全試合終了後、特に優秀と認められた選士を一名選び、最優選士とし、連盟に永久保存の巻物「精妙録」を備え、その署名を後世に遺す。賞品としては、例えば「精妙」の二字を彫つた銀盃位を与えるようなことではどうだろうかと思う。

最優選士をきめる爲には、役員及審査員の合議によることが原則として好ましいと思うが、その時々々の大会の運営方法に適應するようになければならない。

即ち、例えば四試合場に分けた場合には、各試合場毎に、その試合場の審判団の協議により一名の候補を推薦させる。三試合場の場合には三人が推薦される。これ等の候補者を抽籤で組合せてもう一度試合をやらせ、その中から一名を選ぶ場合には、役員、顧問、審判長位の所で決定してはどうかと思う。但し三名の場合には或は総当りとして三試合を行つてもよい。

何れにせよその試合振りを見て最優選士一人だけを選ぶこととし、次点者はつくらぬ方が好い。万一甲乙差をつけられぬ場合には、二名を最優選士とするが好い。そして精妙録に名を遺させる。一度名を遺した者は次回からはこの試合には出場しないこととする。但し、この試合以外の模範試合などには参加出来るようにしたい。

以上の構想により、第一部はポイント本位の試合とし、第二部は位本位の試合とする。更に又、時には第三部として少数の特殊な模範試合を加えることも好いかも知れない。

又、大会終了後、一時間位稽古の時間を設けることも好ましい。

これ等の行事を一日に行う爲には、どうしても第一部については地方別の予選を行つて、出場チーム数を少なくすることが必要とならう。そうすれば、一日のうちに非常に充実したそして楽しく且つ有意義な剣道の祭典を持つことが出来るのではなからうか。そしてこりやることが実業団剣道としては一番よい方法ではなからうか。しかし、この提案をしたからといって、決して現行の段位称号制度や、他の試合行事等に反対するものではないということを念の爲附言して置く。又実業団の選士諸君が、個人として専門技術の修練を重ねて段位称号を受けられることに反対するものでもない。唯それは実業人としての社会に於てはあまり意味はないし、それを表現することは反つて、社会人剣道の普及の爲には邪魔になることもあると考へるからである。実業人の立場からはちがつた意味で剣道を評価したいし、それが広く一般社会から剣道の価値を認識され且つ親しまれてゆく道でもあると思う。

そしてあまり平素稽古の出来ない人でも出場出来るし、又よそでは見られない試合も見られることにもなるということは、又大切なことだと思ふ。